

ダニエル 10：13 (パワポ)

Preface

私がここ 3 年間ほど続けていることがあります。
それは、本の遅読です。 本を遅く読むということです。

以前、速読が流行った時期がありましたが（今も流行っているんでしょうか？）、速読が流行った時期中学生くらいの頃だったと思いますが、親を説得して速読通信講座を申し込んで、私も速読トレーニングを始めたことがありました。

案の定と言いましょうか、予想通り、続きませんでしたし、身にもつかず、「ああ、僕は速読が出来ない人なんだ。」と、諦めました。

「本はいっぱい読まなくてはいけない。」と、ずっと教えられ続けてトライはするものの、全くもってたくさん読めないんです。
本を読むのがどうしても遅いんです。

そして、すべてを白紙状態に戻そうと思って行ったアメリカで、一つの方法にたどり着きました。
それが遅読です。 速読の逆ですね。

「どうせ出来ないんだから、もういいや」と開き直って、聖書も、本も、ゆっくり読むことにしました。
聖書に至っては、1 章読むのに、1 時間以上かかってしまうことがあるぐらいにゆっくり読みました。

本も一気読みが出来ないので、少ない時は一日ひと段落、長くても 1 章分だけ読みながら進めました。

だから課題図書を読むのが大変です。
英語も、韓国語も足りないですので、英語の課題図書は、読むのに辞書を引ながら 5 ヶ月掛かりましたし、韓国語の課題図書もこれまた辞書を引ながら 2 か月半かけて読んだりもしました。

そんな感じですから、行きたくなくても、朝も早よから図書館に通い詰めるしかないんです。

家族も養って行かないといけないのですが、ろくにアルバイトも出来ず、家内に家政婦やベビーシッターの仕事に行ってもらいながらの生活でした。

それでも助けられたのが、家内の「大丈夫！ それでもあなたは、一步一步進もうとしているから、神様が祝福してくださるよ。」という言葉でした。

でも、やっぱり「こんな歩みで、いいんだろうか？ そして、卒業は出来るんだろうか？」と、不安になるんです。

で、祈りました。

「主よ、これまではウサギになりたいと思って歩んで参りましたが、今は、嫌でも亀のように生きることしか出来ません。

どうか、この亀のような歩みの内に、あなたの導きを覚えることが出来ますように、導いてください。

そして、ウサギのように段飛ばしで生きたいと願っていた高慢さから贖いだし、亀のようでも主にある着実な一步一步を踏みしめながら歩む者へと変えてください。」と、3年間ずっと祈っていました。

そして、(ちょっと前置きが長くなりましたが) 日本に帰って来ても続けていることが、めぐみ教会を去った6年前まではしていなかった、聖書と本の遅読です。

Part One

で、私が今遅読している本は、“The Circle Maker” という Mark Batterson という牧師が書いた本です。

キリスト教の信仰書で、祈りについて書かれた本なのですが、ニューヨークタイムズベストセラーにもなっている本なんです。

分からない単語を辞書を引きながら、一日ひと段落ずつ、多くても二段落ずつ読み進めているのですが、毎回泣きます。

で、祈らずには居られなくなります。

遅読のいいところは、一語一語読み流せないで、一つ一つの言葉の重みを感じることが出来ることなのですが、そのためか、毎回毎回、霊的感動を覚えるんです。

で、この本は、祈りについての本なので、当然のようにダニエルについても言及しています。

何とダニエルについて言っているかと言いますと、「祈りこそダニエルの人生であり、彼の人生は祈りだ」と言うんです。

“祈りこそダニエルの人生であり、彼の人生は祈りだ”

人生を表現する言葉は、数あれど、「この人の人生は、祈りだ」という言葉で人生を表現するのを、私自身、この本で初めて目にしました。

そして、こうも言います。

「ダニエルが際立っていたのは、IQ ではありません。PQ です。ダニエルはこの地球上で最も偉大なスーパーパワーである祈りの上に祈りを重ね、彼自身が神の前に跪くことを通して、王たちを、そして帝国を跪かせました。

ダニエルは偉大な政治家であり、偉大な首相でもありましたが、政治学に長けようと努めたのでもなく、哲学に秀でようと努めたわけでもなく、唯一まことの神に祈ることにおいてのみ秀でようと努めました。

そしてダニエルは、祈りをもって、人間文化復興運動であるルネッサンスがヨーロッパ大陸に起こる2000年前に、信仰復興というルネッサンスを起こしました。」

IQ は私たちみんな良く知っている言葉です。Intelligence Quotient 知能指数のことですね。

私が大学生の頃、大学の書籍部で「EQ：心の知能指数」という題の本を見つけて購入しましたが、

EQ Emotional Quotient 感情指数、心の知能指数の重要性について書いていた本です。

この本の内容を簡単に言ってしまうと、「人生の成功の秘訣は、IQ ではなく、EQ だ」という内容です。

つまり、人はどんなにIQ が高くても、心が伴わないならば、成功も出来ないし、いい人生も送ることが出来ないということです。

まあ、間違っただけではないかもしれません。

ただ、聖書は、もう一歩も二歩も先と言いましょ、IQ を補って余りあり、EQ を豊かに育てるばかりか、IQ も EQ もはるかに凌駕する PQ Prayer Quotient、つまり、祈祷指数の重要性について、熱っぽく教えてください。

聖書は、人の問題は、IQ が足りないからでもなく、EQ が足りないからでもなく、PQ、つまり、“祈りの人生に占める比重が” 足りていないからだと教えてください。

それを体現したのがダニエルであり、神はダニエルを通して、これを証明されました。

かと言って、祈りが、長ければ長い程いいものでもなければ、言葉数が多ければ多い程いいものでもない、イエス様は祈りについて教えておられますが、それと同時に、長かろうが短かろうが、言葉数が多かろうが少なかろうが、祈ることを諦めてはいけないとも教えてくださいます。

祈りを諦めることこそ、問題の根本だと教えてくださいます。

Part Two

イスラエルの民たちが、その歴史において最も大きく失敗したことは、人生における祈りの比重を軽んじてしまったということです。

つまり、神との関係を深める祈りを諦めてしまったことこそ、本質的な失敗でした。

サムエル記 8 章に行ってみましょう。

この箇所は、イスラエルの民たちが、神が王であることを拒み、人間の王を立ててくれと、預言者サムエルに言い寄っている場面です。

サムエル記 8 : 4 - 22 (パワポ)

今ここで、イスラエルの民たちは、「神が王であるということが、心もとないので、私たちにも周りの国々のように人間の王を立ててくれ！」と預言者サムエルに迫りました。

要するに、「国の発展は、やっぱり立派な人と、立派な政治家と、立派な政治と、立派な軍事力と、立派な教育と、立派な財政と、立派な力と、立派に見える種々雑多なものを身に着けることに係っている。決して、神との関係性に係っているわけではない！」という神に相対するヒューマニズム宣言です。

サムエルは、「神に相反するヒューマニズム宣言のもと立てられた王権国家政治体制は、やがて、あなたがたを苦しめることになる」と助言しましたが、そんな助言も聞き入れません。

サムエルは、信仰者の群れであるイスラエルの民たちのこの言動を嘆き悲しみ、神様に「こんなことになってしまったのですが、どうしましょう！？」と、涙ながらに訴え出ますが、

神様は、「よかろう。立派な人と、立派な政治家と、立派な政治と、立派な軍事力と、立派な教育と、立派な財政と、立派な力と、立派に見える種々雑多なものを身に着ける道である王権国家を立ててみるよう許可してあげなさい」と、許可しました。

人々は、容姿端麗で、リーダーシップに秀でて、しかも当初は信仰的で、とても謙遜でもあったサウルが王として立って、「やっと私たちも、神が王だなんていう野暮ったくて、まどろっこしいことを言っている民族から脱却を果たした。ついに、いっばしの王権国家の仲間入りが出来た！ 新生イスラエルの誕生だ！」と歓喜しました。

人間が作った人間社会において、いっばしだと認められる資格を、職業を、物を、知識を、様々なものを手にすることが出来たと、喜んだのも束の間、それを保つために苦しみ、悲しみ、その獲得した種々雑多ものに支配されていきました。

私たち人間の歴史、有り様、社会そのものです。

ただイスラエルは、そこから、何度も立ち返る機会が与えられたにもかかわらず、ついには、サムエルの時代から約500年後に国が滅びてしまいました。

そして、ダニエル書の時代に入っていくんです。

愛し合う、赦し合う、分かち合う、労わりあうということを教える聖書の教えよりも、裁き合う、評価し合う、指摘し合う、支配し合う、攻め合う、陣取りし合う、正に、血肉に対する格闘を重ねながら、滅びに向かっている事さえも気付かずに、あれよあれよという間に滅びていきました。

神を王とする野暮ったくて、まどろっこしい民族から、周りの国々と同じように王権国家となったことは、イスラエルの民たちにとっては、「我らの文芸復興、まさに、ルネッサンスだ！」と思ったことでしょう。

でも、結果的に、立派な政治も、立派な政治家も、立派な軍事力も、立派な種々雑多なもの、何一つとっても、国の、民族の、社会の、人の繁栄には繋がっていませんでした。

Part Three

何が彼らに足りなかったんでしょう？

IQ ですか？ EQ ですか？ 違います。

PQ です。 PQ が足りず、PQ を失い、PQ を軽んじたのです。

つまり、神との関係が足りず、神を見失い、神を軽んじ、祈りを忘れたのです。

ここでダニエルなんです。

ここで、神様は、ダニエルをお立てになるんです。

何も無いところにダニエルをお立てになりました。

立派な国も、立派な政治家も、立派な財力も、立派なものなんか何一つないと

ころにダニエルをお立てになり、バビロン帝国の全歴史を通して、ペルシア帝国の全歴史を通して、ダニエルほどの立派な政治家、リーダーはいない程に、ダニエルを立派な首相、指導者としてお立てになりました。

ダニエルがやったことは、立派な政治学に秀でることでもなく、立派な利権関係を構築することでもなく、立派な財を貯めることでもなく、立派なものを獲得することでもなく、ただ一つのことには専心しました。

祈りです。

神との関係に専心し、神を重んじ、神に答えがあるということを体現しました。

ダニエルは、信仰の内に祈り手として立ち、祈りこそ答えであり、祈りこそ力であり、祈りこそ繁栄であると示しました。

そして、神の御心に適う、真のルネッサンスを起こすわけです。

文芸復興が人を幸いにするのではなく、信仰復興が人を幸いにするということを身をもって示しました。

だからと言って、ダニエル書の主人公をダニエルにしてしまうのは、安直な発想かもしれません。

私たちが、ダニエル書を読み解いていく時に、陥りやすい観点と言いましょうが、解釈適用は、「ダニエルは日に三度も祈る立派なクリスチャンでした、彼に倣いましょう、チャンチャン」というダニエルを主人公に祀り上げる観点です。

もちろん、ダニエルは私たちが見習うべき信仰の先達であります。

でも実のところ、ダニエル書の真の主人公は、ダニエルではなく、神です。

また、ダニエルの幻の内に現れるイエス・キリストであり、イエス・キリストの生き様に帰着するんです。

イエス様は、力によらず、富によらず、学によらず、方法や手段によらず、

唯一まことの父なる神との関係により、愛することにより、赦すことにより、分け合うことにより、労わりあうことにより、そして祈ることにより、見てくれない、神のお与えなさる中身の詰まった繁栄を成就なさいました。

サムエルの時代のイスラエルの民たちは、見てくれを整えれば、中身は自然に詰まっていくと考えました。

そして、それこそ、「我らのルネッサンスだ」と考えました。

でも全くもって、中身が詰まることはありませんでした。

中身が詰まるどころか、中身が詰まって行かないことに焦りを覚え、さらに、見てくれと体裁を整えることに専心しました。

でも、中身はスカスカになるばかりです。

だって、PQ の価値を軽んじたわけですから。

まことの神に祈ることを諦めたんですから、中身が詰まるわけがないのです。

父なる神様は、ダニエルのような PQ を重んじ、PQ に生きる人を立てて、真のルネッサンスをダニエルの時代に起こされました。

Part Four

そして、私たちの時代です。

ローマ帝国が滅び、さらにローマ帝国の繁栄に乗っかって、教会が間違った不必要な権力を行使してきたことに異議を唱え、反旗を翻して、

人が中心となり、人のすばらしさを追求し、人に希望を置く人間賛歌を、文芸復興という形で表したルネッサンスの時代が 14 世紀に始まり、やがて、このルネッサンスと称する文芸復興運動は、16 世紀には全ヨーロッパに展開してきました。

そして、産業革命に繋がり、神という存在を排除しようとする科学技術至上主義が全世界を席卷し、人間賛歌を歴史の中心に据えながら、私たち人間、今日、ここまで歩んで参りました。

で、どうですか、世界は？

教会が不必要な権力を手にし、振りかざし、人々を束縛せしめたという歴史的な事実に対しては、真正面から向き合い、反省し、その間違いを再び起こさないように、いつの時代も遜らなければなりません。

ただし、罪人の集まりである教会の横暴ぶりを見て、「神なんぞいないんだ！それ見た事か！」と、神の存在を否定し、人間賛歌の道を選び進むことは、大いなる誤りであり、悪であり、罪の現われです。

いつも人の心の奥底には、いつ噴火してもおかしくない罪なる思いがあります。

それは、“神の存在を否定すること”です。

その思いは、どんな小さなことをきっかけにしても、いつでも噴火させてやるという欲求と共にあります。

そして、ひとたび、噴火させた時には、この噴火は理に適ったことであり、当

然のことであり、正しいことだと正当化して、人間賛歌の道をこの吹き上がったマグマで満たして行きます。

でも、そこには命が見られません。
どす黒いものだらけで、命が見られません。

神様は、祈りの人ダニエルをお立てになって、どす黒いところに、まことの命をもたらせなさいました。

Part Five

今日の聖書箇所、ダニエル書 10 : 13 の御言葉を見てみましょう。

ダニエル 10 : 13 (パワポ)

21 日間の断食祈禱をしていたダニエルのところに、天使ガブリエルが現れて、「ダニエルよ。 あなたの祈りは、あなたが祈り始めた最初の日から神様に聞かれているし、その祈りの応答をあなたのところに届けるために、私が遣わされたが、21 日間もの間、ペルシアの国の君という悪魔の邪魔が入り、あなたのもとへとやって来ることが遅くなってしまった。

天使ミカエルが助けに来てくれて、今やっとあなたのところへと来ることが出来た。

申し訳なかった。」と言います。

祈りは、正に、霊的戦いの最前線です。

そして、神の名において、主イエスの名において祈った祈りが、地に落ちてしまうことは決してありません。

ダニエルは、21 日間もの間、断食祈禱を続けながら、祈りの応答が来ることを信じて祈り続けました。

では、その祈りは何でしょう？

以前見ましたダニエル書 6 : 10 によれば、祈りとは、感謝を主なる神様に献げることです。

ダニエルの祈りの内容は、常に感謝でした。

祈りの応答がなくとも感謝、獅子の穴に投げ込まれることが決定しても感謝、どんな状況でも感謝の項目を挙げ、神に感謝することがダニエルの祈りでした。

このダニエルの祈りに倣って、2021 年になってまず、感謝の項目を 10 個挙げることから、2021 年を始めたという、私の尊敬する方から今年初めにメ

ールをいただきました。

私たちの献げる感謝の祈りが、地に落ちてしまうことは決してありません。

私たちに神様が期待しておられることは、祈りを諦めず、神を諦めず、祈り続けることです。

今、私たちに必要なのは、IQ でもなく、EQ でもなく、PQ です。

今、私たちに必要なのは、立派な国家でもなく、立派な企業でもなく、立派な政治家でもなく、立派なリーダーでもなく、立派な学者でもなく、立派な医者でもなく、立派な法律家でもなく、立派な先生でもなく、立派な保育士でもなく、立派な介護士でもなく、立派なサラリーマンでもなく、立派なアルバイト・パートでもなく、立派な農夫でもなく、立派なお父さんでもなく、立派なお母さんでもなく、立派な息子でもなく、立派な娘でもなく、立派な牧師ではありません。

今、私たちに必要なのは、祈る国家であり、祈る企業であり、祈る政治家であり、祈るリーダーであり、祈る学者であり、祈る医者であり、祈る法律家であり、祈る先生であり、祈る保育士であり、祈る介護士であり、祈るサラリーマンであり、祈るアルバイト・パートであり、祈る農夫であり、祈るお父さんであり、祈るお母さんであり、祈る息子であり、祈る娘であり、祈る牧師です。

今、私たちの社会に、世界に必要なのは、IQ でもなく、EQ でもなく、PQ です。

まことの父なる神様、主イエス様に、祈り続けることこそ、今、必要なことです。

Conclusion

最後にルカ 18 章を見てみましょう。

ルカの福音書 18 : 1－8 (パワポ)

主イエス様が再び来られた時、この地上に、祈りに専心しているという信仰が果たして見られるでしょうか？

イエス様は、この例え話を「いつでも祈るべきであり、失望してはいけないことを教えるため」に、話されました。

今、私たちが、神様から期待されていることは、祈ることです。

神様は、私たちの祈りを待っておられます。

ならば、祈りましょう。
私たちに足りていないのは、祈りです。
だから、祈りましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ルカの福音書 18 : 1